男性の介護参加に対する意識
－「男の介護講座」参加者に対するアンケート調査より－

Awareness of Men's Participation in Long-term Care
－From a Questionnaire Survey of Male Long-term Care Course Participation－

（2022年３月31日受理）

名　定　慎　也
Shinya Nasada

Key words：介護，男性介護者，在宅介護，家族の介護，男女共同参画，性別的役割

現代社会は，高齢化，核家族化，高齢夫婦世帯の増加等によって家庭での老老介護が増えている。また，疾病や認知症をもつ高齢者の増加により，施設だけでなく，在宅で求められる介護も高度化・複雑化している。家庭での主な介護者は，要介護者等との「同居」が最も多く，主な介護者の性別は，男性が35.0％である。これまで「家事」や「介護」に携わったことがない男性が，急に介護を担うことになると，困惑したり，疲弊したりし，虐待に至るケースも少なくない。本研究では,増加する男性介護者の一助となることを目的として実施した「さんかく岡山」での「男の介護講座」参加者に対するアンケート及びインタビュー調査より，男性の介護参加に対する意識について考察した。結果，男性の家事参加に関する意識は向上してきたが,「介護参加」にはまだまだ,「なじみが薄く」必要に迫られないと「介護に興味関心をもったり，介護講座に参加しようと思ったりしない」傾向にあることがわかった。しかし，介護に直面している男性は，介護講座の参加によって,「今困っていることに対して答えが聞けたり，介護負担の軽減のための福祉用具などを知る」良い機会となる。未だ家事や介護は女性の方が得意とか，女性の役割という性別的役割意識も残っているが，男性も介護に直面する可能性は高い。そのため,「介護に対する備え」が必要であり，男性の介護参加の促進という意識改革を進める必要が示されたといえる。

は　じ　め　に

日本社会では従来，家庭での家事や育児，介護などは女性の役割とされてきたが，現代は，核家族化や一人暮らし世帯の増加といった「家族形態の変化」，夫婦共働きや子どものいない世帯の増加による「家庭での役割の変化」が見られるようになった。「介護」においては，家族形態の変化だけでなく，認知症や疾病などによる介護の重度化・複雑化により,「介護は社会全体で担う」という介護の社会化が進んでいる。それに伴い介護保険制度等多様なサービスを活用し，自分が望む場所で自立した生活が営める仕組みも整備された。しかし,高齢化・核家族化・晩婚化・長寿化などが絡み合い，高齢者が高齢者を介護する「老老介護」，介護する側，される側双方が認知症を発症している「認認介護」，要介護状態となっても適切な介護サービスを受けられない「介護難民」などの課題も生じている。

令和元年度国民生活基礎調査[1)]によると，2019(令和元)年６月６日現在における全国の世帯総数は5178万５千世帯で，65歳以上の者のいる世帯は2558万４千世帯（全世帯の49.4％）と半数を占めている。65歳以上の者の家族形態を見ると「夫婦のみの世帯（夫婦の両方又は一方が65歳以上）」が40.4％で最も多く，次いで「子と同居」の者が35.9％,「単独世帯」の者が19.6％であり，高齢者夫婦世帯や高齢者の一人暮らし（単独世帯）が半数以上を占め，年々増加している。次に介護保険法の要介護者のいる世帯をみると,「核家族世帯」が40.3％で最も多い。特に核家族世帯のうち夫婦のみの世帯が

22.2%にのぼる。次いで「単独世帯」が28.3%となっている。主な介護者は，要介護者等と「同居」が54.4%で最も多く，「同居」の主な介護者は「配偶者」が23.8%，次いで「子」が20.7%，「子の配偶者」が7.5%となっている。「同居」の主な介護者の性別は，男性が35.0%であり，在宅介護者における男性の割合が1977年の９%(全社協「老人介護の実態調査」）と比べても増加している。また，男性介護者35.0%のうち60歳以上が72.4%と介護者の高齢化も進んでいる。

現代社会は，「男女が，社会の対等な構成員として，自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され，もって男女が均等に政治的，経済的，社会的及び文化的利益を享受することができ，かつ，共に責任を担うべき社会」（男女共同参画社会基本法第２条）という男女共同参画社会を目指し，性差や性別的役割分担の解消等ジェンダーレスも求められている。今では，男性の家事参加や育児などに対する働きかけは多く聞かれるようになったが，男性の介護参加については，内閣府男女共同参画局や，男性介護ネット（2009年３月発足）などの支援や取り組みなど在るものの，まだまだ一般的には聞かれることは少ない。

このような社会背景からも，高齢になった男性が，突然家族の介護に直面し，家事を含め介護に困惑してしまうことは大いに起こり得る。そこで，令和３年度，さんかく岡山の男女共同参画の啓発事業として「男の家事講座」と「男の介護講座」を実施した。講座はそれぞれ違うテーマで各３回実施した。本研究では「男の介護講座」の参加者に「講座の評価，介護経験の有無，男性の介護についての意見など」についてのアンケート調査を行い，さんかく岡山の介護講座参加職員に「男の介護講座」に関するインタビュー調査を行った。また，本研究は男性の介護参加に対する意識調査を行い，増加する家庭における男性介護者の一助とすることを目的に調査結果を分析・考察した。その結果，「家事」より「介護」の方が男性には「なじみが薄い」こと，介護は必要に迫られないと「介護に興味関心をもったり，介護講座に参加しようと思ったりしない」傾向にあることがわかった。しかし，介護に直面している男性は，介護講座の参加によって，「今困っていることに対して答えが聞けたり，介護をする上でのコツや，介護負担の軽減のための福祉用具などを知る」ことができる良い機会になることも明らかにできた。現超高齢社会において，介護は避けて通れない。心の準備だけでなく，介護講座などで知識技術等を得るなど「介護に対する備え」が必要であり，今後は男性の介護参加の促進という意識改革も課題となろう。

1 研 究 方 法

以下の通りアンケート調査とインタビュー調査を実施した。

（1） アンケート調査

「男の介護講座（第１回～第３回)」の受講者に対し受講後アンケートを実施した。

・第１回目：2021年10月８日（金）13：30-15：30
　テーマ：「要介護高齢者との接し方 ～認知症の理解とコミュニケーション～」
・第２回目：2021年11月12日（金）13：30-15：30
　テーマ：「移動・移乗の介助と腰痛予防 ～双方にやさしい身体の使い方～」
・第３回目：2021年12月10日（金）10：00-12：00
　テーマ：「衣服の着脱介助 ～好みに応じた衣生活を楽しむために～」

上記の内容で，男性を対象とする講座を開催した。各回の実施状況や回答結果より，設問を追加しながら計３回アンケートを収集した。内容は図Ⅰ（第３回目のアンケート用紙参考）の通りである。

（2） インタビュー調査

さんかく岡山の「男の介護講座」参加職員２名にインタビュー調査を行った。内容は①今年度のさんかくマルシェ（講座）の状況と男の家事講座との違い，②男の介護講座を担当した感想，③男性介護者の必要性，④男女共同参画の視点で男性の介護参加の課題について聴取した。これらは，（1）のアンケート結果と併せて考察に使用した。

（1）（2）の倫理的配慮としては，介護福祉教育や研究目的以外では使用しないこと，個人情報の保護に努めることを説明し，同意を得た。

アンケート

本日は、男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」の講座にご参加いただきありがとうございました。今後の事業をよりよいものとするためにあなた自身のことや感想をお聞かせください。

＊講座名：「男の介護講座」 衣服の着脱介助 ～好みに応じた衣生活を楽しむために～

＊開催日時　2021年12月10日（金）13時30分～15時30分

1 この講座に参加された理由を教えてください。（以下、該当する□に ✔ をつけてください）

□現在、介護をしているから　□今後、介護の必要に迫られるから
□予備知識を得るため　□その他〔　　〕

2 この講座に参加していかがでしたか。
□よかった　□どちらかと言えばよかった　□普通
□どちらかと言えばよくなかった　□よくなかった
＊上記回答の理由など、感想をお聞かせください。〔　　〕

3 今回「男の介護講座」の参加は初めてですか。
□ 初めて　□ 前回も参加した

4 「前回も参加した」方も含め、以下の（1）～（4）にお答えください。
（1）現在あるいは過去に、介護の経験はありますか。（複数回答可）
□ 現在、家族・親戚を（在宅）介護している　□ 現在、家族・親戚が介護施設にいる
□ 過去に家族・親戚を（在宅）介護していた　□ 過去に家族・親戚が介護施設にいた
□ 介護をしたことがない

（2）（1）で、施設も含め介護経験が「ある」と答えた方にお聞きします。介護をする上で困ったことはありますか。　また、「ない」と答えた方も介護について不安や疑問に思うことがあればお書きください。〔　　〕

（3）介護に関して何か準備をしていることがあれば教えてください。
□自宅をバリアフリーにしている　□介護や介護施設について情報収集している
□民間の介護保険に加入している　□その他〔　　〕
□健康寿命を延ばすように心がけている（食事、口腔ケア等健康管理・体力づくり・趣味など）

（4）もしもご自身に介護が必要となった場合、在宅と介護施設のどちらを希望しますか。
また、その理由があればお答えください。
□在宅　□ 介護施設　□ わからない　※理由〔　　〕

5 男性の介護について率直なご意見をお聞きします。
（1）男性が介護することはハードルが高いと感じますか？　その理由を教えてください。
□ はい　□ いいえ　※理由〔　　〕

（2）このような男性向けの介護講座は今後も必要だと思いますか。
また、その理由を教えてください。
□ 必要だと思う　□ 必要だと思わない　□ わからない　※理由〔　　〕

6 差し支えなければあなたについて教えてください。（該当する番号に〇をつけてください）
（1）性別　① 女性　② 男性　③ その他

（2）年代　① 30歳未満　② 30代　③ 40代　④ 50代　⑤ 60代　⑥ 70歳以上

（3）介護職であるかどうか
① 現在介護職である　② 過去に介護職だった　③ 介護職ではない

（4）家族構成（複数選択可）
①配偶者　②父　③母　④義父　⑤義母　⑥祖父　⑦祖母
⑧義祖父　⑨義祖母　⑩兄弟姉妹　⑪子（子の配偶者含む）
⑫孫（孫の配偶者含む）　⑬ その他（　　）

（5）住所　① 北区　② 中区　③ 東区　④ 南区　⑤ 岡山市以外（　　）

ご質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

図１　アンケート用紙（第３回目）

２　研　究　結　果

１）アンケート調査結果

２-１　第１回目のアンケート結果について

第１回目の対象者の属性は，表１-１に示した。基本的には男性対象であったが，夫婦での参加１名とさんかく職員１名の計２名が女性であった。年齢は無記入を省くと60歳以上が９割を占めた。

表１-１　第１回目　アンケート対象者の基本属性

		全体（N=11）	
		N	%
性別	男	9	81.8
	女	2	18.2
年齢	40-49歳	1	9.1
	50-59歳	0	0.0
	60-69歳	3	27.3
	70歳以上	5	45.5
	無記入	2	18.2
家族構成（複数回答）	配偶者	8	100.0
	母	2	25.0
	義母	1	12.5
	祖母	1	12.5
	子	2	25.0
	無記入	3	37.5

※家族構成は有効数8名で割合を算出

この講座に参加した感想については，「良かった」９名（90%），「どちらかといえばよかった」１名（10%）であった。評価の理由や感想は表１-２の通りである。第１回は「要介護高齢者との接し方」で，認知症高齢者と関わる際のポイントや，介護の必要な場合の相談機関など，高齢者介護の基本を説明したが，家族介護に直面している人も多く，要介護者への基本的対応は興味関心が高かった。

表１-２　講座の評価理由・感想

- 介護の考え方、接し方が理解できた。（60代男性）
- やはり本やインターネット情報ではわかりにくいので専門家の先生のお話はよかった。
- 先生の経験が豊富で具体的だった。再度聞きたい。（70代以上男性）
- 93歳の義母がMCIでこれから認知症になった時の参考になった。（70代以上男性）
- 介護の問題はとても奥が深い。介護に関わる仕事をしていますが、講座で学んだことを実際に少しでも役立てていければと思う。これからの超々高齢社会の事を考えると本当は暗くなる。（60代男性）
- 実際に現場で働かれた経験をまじえての話はとても説得力があり分かりやすかった。（60代男性・40代女性）
- 受講生の方たちもとても興味津々に話を聞いていたと思う。（さんかく職員）
- 介護は接し方において育児と似ているとおもった。自分の価値観で判断しない、相手のペース、進み具合に沿うなど寄り添うことが大切。（さんかく職員）

次に，現在あるいは過去の介護経験の有無は，「現在在宅介護中」３名，介護に携わったことのある人を合計すると５名，「介護経験がない人」５名となった（表１-３）。介護に携わった際の「困ったこと」については表１-４の通りだった。

表１-３　家族への介護経験

家族への介護経験	N=10	%
現在在宅で介護している	3	33.3
現在介護施設にいる	0	0
過去に在宅で介護していた	1	11.1
過去に介護施設にいた	1	11.1
介護の経験はない	5	55.6
無記入	1	11.1

※割合は有効数で算出

表１-４　介護で困ったこと

・親子間だと感情的な部分が出てしまうので喧嘩になりやすいこと。（70代以上男性）
・現在在宅介護をしているがこれからデイサービスの利用を考えようと思っている。（70代以上男性）

次に，自分自身が将来介護される場合の希望する形態は,「分からない」の４名が最も多く,「介護施設」３名,「在宅介護」２名であった(表１-５)。その理由としては,表１-６の通り「本当は在宅で暮らしたいが，家族に迷惑をかけたくないため，迷ったり，介護施設を希望したりする人」が多かった。

表１-５　将来介護される場合の希望する形態

介護される場所	N=10	%
在宅介護希望	2	20
介護施設希望	3	30
わからない	4	40
無記入	1	10

表１-６　将来介護される場所を希望する理由

＜在宅と答えた人＞
・最後まで自分らしく暮らしたい。（70代以上女性）
＜介護施設と答えた人＞
・家族に面倒をかけることになるから（70代以上男性）
・本心は在宅での介護を望むが、家族に迷惑をかけたくない気持ちがあり、お金は必要だが、施設に入所した方が家族のためだと思う。本当は寂しいが、、、。（60代男性）
・やはり在宅の方が安心するが、わが子でなければ落ち着かない。なにより子どもに迷惑をかけたくない気持ちが強いので施設に入るお金もためておかねばと思う。（40代女性）
＜わからないと答えた人＞
・「在宅」を希望したいところだが家族に迷惑をかけたくないし、そうかといって今の年齢で「介護施設」を選択するという気持ちにもなれない。（60代男性）

２-２　第２回目のアンケート結果について

第２回目の対象者の属性は，表２-１に示した。参加人数は前回より２名減，性別・年齢等分布は前回と大きな変わりはなかった。受講が初めての人が３名(33.3%),「前回も参加した人」が６名（66.7%）であった。参加者に過去介護職であった人が１名いた。

表２-１　第２回目　アンケート対象者の基本属性

		全体（N=9）	
		N	%
性別	男	7	77.8
	女	2	22.2
年齢	40-49歳	2	22.2
	50-59歳	1	11.1
	60-69歳	1	11.1
	70歳以上	5	55.6
家族構成（複数回答）	配偶者	7	77.8
	父	1	11.1
	母	3	33.3
	義母	1	11.1
	祖母	1	11.1
	子	2	22.2

この講座に参加した感想については,「良かった」９名（100%）となった。評価の理由や感想は表２-２の通りである。第２回は「移動・移乗の介助と腰痛予防」で実際に杖や車いす介助の方法等実物を見ながらの講座だったため,「わかりやすい」という声が多数あった。

表２-２　講座の評価理由・感想

・杖の使い方が良く分かった。
・かなりつっこんだ話を聞けて良かった。受講者の方も自分の気づかない点を質問していただき助かった。（40代男性）
・毎回何気にしている行動（立ち上がりなど）もきちんと分析し、コツをつかんでおけば、お互いが楽に介護が出来ることがわかった。（40代女性）
・杖や車いすにも、色々と段階や機能があることを知り役に立った。（40代女性）
・現場で使われている実際の用具を見たり触れたりすることで、とても分かりやすかった。デモンストレーションがとても分かりやすかった。（60代男性）
・少人数ということで、たくさんの質問がでやすく、また、丁寧に答えながらの進め方は受講者に大変好評だった。（さんかく職員）
・実技の際も受講者からの質問に丁寧に答えていただくことで、より中身が濃い内容になった。（さんかく職員）

次に，現在あるいは過去の介護経験の有無は,「現在在宅介護中」３名，介護に携わったことのある人を合計すると７名,「介護経験がない人」は３名であった（表２-３)。介護に携わった際の「困ったこと」については表２-４の通りで,「異性への入浴介助に困った」とする回答が多かった。

表２-３　家族への介護経験

家族への介護経験	N=9	%
現在在宅で介護している	3	37.5
現在介護施設にいる	1	12.5
過去に在宅で介護していた	1	12.5
過去に介護施設にいた	2	25
介護の経験はない	3	37.5
無記入	1	12.5

※割合は有効数で算出

表２-４　介護で困ったこと

・女性でお風呂に入りたがらない等、衛生面での問題に対処するのに困った。（40代男性）
・風呂での介護　　（70代以上男性）
・本人の「意欲」がない時どう声掛けをすればいいか。主たる介護者へのケアをどうすればいいか。（50代男性）

次に，自分自身が将来介護される場合の希望する形態は,「分からない」の４名が最も多く,「介護施設」２名,「在宅介護」３名であった(表２-５)。その理由としては,表２-６の通りだったが，前回と違う意見としては,「コロナ禍で面会できないから在宅が良い」,「まずは健康維持増進に努める」等の意見が示された。

表２-５　将来介護される場合の希望する形態

介護される場所	N=9	%
在宅介護希望	3	33.3
介護施設希望	2	22.2
わからない	4	44.4

表２-６　将来介護する場所を希望する理由

＜在宅と答えた人＞
・コロナ禍では在宅の方が良いかも。家族と面会できないのは困る。（70代以上男性）
＜介護施設と答えた人＞
・寂しい気持ちはあるが、家族に負担をかけたくないので、施設を希望しようと考えています。しかし、本心は在宅介護を望みたいです。（さんかく職員）
＜わからないと答えた人＞
・介護をされることがないように健康維持、筋力向上が必要だと思った。秋からジムに通っています。（40代女性）

２-３　第３回目のアンケート結果について

第３回目の対象者の属性は，表３-１に示した。参加人数は，急遽午後⇒午前への時間変更をしたためか，前回より２名減，性別･年齢等の分布は大きな変わりなし。参加回数は,「前回も参加した人」が７名（100%）だった。前回に続き元介護職の男性も参加した。

表３-１　第３回目　アンケート対象者の基本属性

		全体（N=7） N	%
性別	男	6	85.7
	女	1	14.3
年齢	40-49歳	2	28.6
	50-59歳	1	14.3
	60-69歳	2	28.6
	70歳以上	2	28.6
家族構成（複数回答）	配偶者	5	71.4
	父	1	14.3
	母	2	28.6
	子	3	42.9

この講座に参加した感想については,「良かった」７名（100%）となった。評価の理由や感想は表３-２の通りである。第３回は「衣服の着脱介助」で実際の介護方法や在宅介護で活用できる「スライディングシートなどが知れて良かった」という意見が聞かれた。その他，理由や感想は表３-２の通りである。

表３-２　講座の評価理由・感想

・自分が欲しい現場で活かせる知識が得られたため（40代男性/介護職経験者）
・まだ不十分だが、介護の方法がわかってきた。（50代男性/在宅と施設で介護中）
・介護上の資材(スライディングシート等)の説明が良かった。（70以上男性/過去在宅介護経験者）
・被介護者の気持ちや行動など基本的な考えや対応がわかり、よかった。（60代男性/介護経験なし）
・いつも実技や講師の先生の体験談を交えての講義はとても楽しく説得力もあり、大きな学びがあると思う。（さんかく職員）
・被介護者の着替えは残存能力を最大限に利用して力を貸してもらうことは、本人にとっても退化しない点で良いし、介護者にとっても楽になることがよくわかった。また、寝たきりの人を介護するのは、寝ているだけでも大変（褥瘡予防）だと思った。（さんかく職員）
・スライディングシートなどの紹介と説明は大変役に立ったと思う。（さんかく職員）

次に３回目は，講座に参加した理由（複数回答可）も聞いた（表３-３）。結果は,「現在介護をしている」,「今後のため」など必要に迫られている参加者が６名と多かった。「今後のため」については,「母親を姉がみてくれているが今後は自分がみる可能性がある」といった回答であった。「その他」は「介護職に就こうと考えているがブランクがあってそのリハビリのため」という内容であった。

また，表３-４「家族の介護経験」からも,「現在在宅介護中」３名,「現在介護施設にいる」１名,「過去在宅

介護をしていた」１名など必要に迫られた人の参加が多い。介護に携わった際の「困ったこと」については前回同様,「入浴介助に困った・入浴介助方法を知りたい」という意見が多かった（表３−５）。

表３-３　講座に参加した理由　※複数回答可

講座に参加した理由	N=7	%
現在介護をしているから	2	28.6
今後のため	4	57.1
予備知識を得るため	2	28.6
その他	1	14.3

表３-４　家族への介護経験

家族への介護経験	N=7	%
現在在宅で介護している	3	42.9
現在介護施設にいる	1	14.3
過去に在宅で介護していた	1	14.3
過去に介護施設にいた	0	0
介護の経験はない	3	42.9

表３-５　介護で困ったこと

・風呂に入りたがらない、服を着替えないなど、衛生面を維持すること。相手が女性の時困難さを感じる。
（40代男性・介護職経験者）
・入浴の楽な介助方法・コツを教えてほしい。
（70以上男性・在宅介護経験者）
・少しでも介護に必要な情報を知りたい。
（60代・介護経験なし）
・介護が必要とされる場面は意外といきなりやって来るように思っている。まだまだ早いだろうと思わず、何もない（介護の必要のない）時期から知識を得ておくことはとても役立つであろうと思う。たぶんその日がいきなり来た時には何からどう進めていけばよいのかパニックになって分からないのではないかと心配される。
（さんかく職員）
・自分や配偶者が民間の介護保険に加入すべきかどうか悩む。（さんかく職員）

次に，自分自身が将来介護される場合の希望する形態は,「在宅介護」の４名が最も多かった（表３−６）。その理由としては，表３−７の通りで,「できれば自宅で」,「家族に迷惑をかけることを理解した上で家族と同じ時間と空間で過ごしたい」という意見が示された。

表３-６　将来介護される場合の希望する形態

介護される場所	N=7	%
在宅介護希望	4	57.1
介護施設希望	1	14.3
わからない	1	14.3
無記入	1	14.3

表３-７　将来介護する場所を希望する理由

＜在宅と答えた人＞
・できれば自宅でと思っている。（60代/介護経験なし）
・家族にとっては大きな迷惑となることは充分に理解した上でやはり家族（身内）と同じ時間を同じ空間で死ぬまで可能であれば過ごしたいと考えている。
（さんかく職員）
＜介護施設と答えた人＞
・家事をしない夫に介護は出来ないと思うから。
（40代女性）

次に,表３−８の通り「介護のために準備していること」は,「自宅のバリアフリー」３名,「施設の情報収集」２名,「健康寿命の延伸」４名と参加者のほとんどの人が,何らかの介護予防のための行動をとっていた。

表３-８　介護のために準備していること※複数回答可

介護のために準備していること	N＝7	%
自宅をﾊﾞﾘｱﾌﾘｰにしている	3	60
施設等の情報収集をしている	2	40
民間の介護保険に加入している	0	0
健康寿命を延ばすよう心がけている	4	80
無記入	2	40

※割合は有効数で算出

次に,「男性が介護することはハードルが高いと感じるか」については表３−９の通り,「高い」３名（42.9%),「高いと感じない」４名（57.1%）でほぼ同じ割合だった。その理由は表３−10の通りである。ハードルが高い理由としては,「利用者が女性の場合，避けられることがある」。高いと感じない理由は「正しい知識があれば性別関係なくできること」等の意見が示された。

表３-９　男性の介護について

男性の介護について	N=7	%
ﾊｰﾄﾞﾙが高い	3	42.9
高いと感じない	4	57.1

表３-10　男性の介護することへの意識

＜ハードルが高い＞
・利用者が女性の場合、避けられることが多いのでそのために技術向上が必要だと感じる。
（40代男性/介護職経験者）
・自分が女性なので男性の気持ちはわからないが、人によると思う。身に降りかかるとやらざるを得ないため、する人もいれば、貯えがあって無理だと思えば施設にお願いするのでは。（さんかく職員）

＜高いと感じない＞
・必要になれば仕方のないこと・やらざるを得ない
（60代男性/介護経験なし・50代男性介護中）
・決してハードルが高いとは思わない。正しい知識があれば性別関係なくできることだと思う。今後は性別に関係なくすべきことと考える。（さんかく職員）

最後に「男性の介護講座の必要性」については表３-11の通り，「必要性がある」７名（100%）と回答した。その理由としては,「高齢化で要介護者が増加するから」,「コツや知識を持つことでいざという時に慌てずに済む」等の意見があがった。

３回シリーズでの「男の介護講座」には，延べ人数27人（３回通し参加３人，２回参加７人，１回のみ参加４人）が受講した。

表３-11　今後このような講座は必要か

男性介護講座の必要性	N-7	%
必要だと思う	7	100
必要だと思わない	0	0
わからない	0	0

２）インタビュー調査の結果

さんかく岡山で講座に参加した職員２名（男性１名，女性１名）にインタビューを行った。聴取した内容を表３-12「今年度のさんかくマルシェ（講座）の状況と男の家事講座との違い」，表３-13「男の介護講座を担当した感想」，表３-14「男性介護者の必要性」，表３-15「男女共同参画の視点で男性の介護参加の課題」にまとめ，示した。

表３-12　さんかくマルシェの状況と男の家事講座との違い

- さんかくマルシェは男女共同参画社会を推進するための第一歩として、まずさんかく岡山に足を運んでいただき、存在を知っていただくことを目的に講座やシアター、落語など興味の引ける活動をしている。
- 今年度の男性の家事講座は延べ人数48名（1回目「洗濯」13人、2回目「防虫・防カビ対策」、15人、3回目「整理」20人）。昨年も3回実施。昨年も15名程度の参加。女性の参加も5名あり、男性を対象としているが、夫婦での参加は可能としており、家事なら聞きたいと妻が夫を誘って参加されたので参加率が上がっている。
- 介護より家事の方が身近に感じている。家事は必要にかられている。
- 家事ができてはじめて介護。介護の方があとのイメージで、レベルは家事より介護の方が難しくハードルが高いのではないか。
- 介護は必要に迫られることが少ない・介護が必要な環境や必要性があればやるが、直面してなければ学ぼうと思いにくい。介護をしないといけない、今後する可能性があると実感がわきにくい。縁が遠いと思っている。
- 洗濯などは、脱いだら洗濯機に入れる、スイッチを押しておく、洗濯たたみなど生活の中でとっつきやすいのではないか

表３-13　男の介護講座を担当した感想

- 少人数だったため実技ではじっくり質問に対応でき、受講者は満足していただけたと思う。
- 私自身、介護は大変なイメージがあったが、楽に介助できるようなコツや便利な介護グッズを知っておくだけで意外と見方が変わってきた。（もちろん大変な事には間違いないが・・）
- 性別問わず、介護が身に降りかかった時慌てないためにも、このような講座は必要だと思う。
- 日時設定について、今年度は金曜日の午後にしたが、仕事をしている人がキャンセルするケースが何件かあったため、来年度企画するなら土日も検討しようと思う。

表３-14　男性介護者の必要性

- 男性の介護講座に着目した理由の一つとして、介護はこれまで、女性が担いがちだった介護だが、超高齢社会・核家族化などの結果、「老老介護」が深刻化し、もはや介護は年齢・男女関係なく訪れる問題であることから、特に男性に考えていただきたいと思ったから。
- 男性介護者は必要不可欠だと思う。力仕事、老老介護、女性だけだとまわらない
- 講座を体験して、「介護は急に来る」「予期せずに来て困る」ので、早めから覚悟しておく必要がある。
- 参加をしてみて、介護の状況がわかったり、関わり方がわかったりし、興味関心がわいた。やはり、このような講座等できっかけを作ることや活動が呼び水になるので重要
- 3回の講座後84歳の母親が転倒、足を骨折し一気に介護が必要になった。介護にどっぷりつかることになった。急にこのような状況になり困惑することや、実際の介護の仕方など、「こういうことか」これは知っておく方が良い。少しでも備えておく方が良いと痛感した。

表３-15　男女共同参画の視点で男性の介護参加の課題

- 介護は必要にかられて突然やってくる問題だと思うが、介護の前提として家事ができないとハードルが更にあがると思うので男性も積極的に家事に参加することが課題。
- 女性の方が得意という先入観がある。
- できれば家事や介護はしたくないという思い。遠慮しておきたい。
- 女性に任せておけばよいという勘違い。
- 男性は外の仕事、女性は家庭内の仕事という風潮がやはりあるのではないか？改善・意識改革が必要。
- 介護は避けては通れない、心の準備をしておくことも必要

３　考　　察

３-１　男性の介護講座への参加について

「男の介護講座」の受講者は，延べ人数27人で１日平均９名であった。以前，さんかく岡山で実施した「男性の家事講座」の受講者は延べ人数48名１日平均16名であり「家事講座」より「介護講座」の参加人数は少なかった。理由としては,①「介護講座」は初めてだったが「家

事講座」は昨年も３回実施したので周知されていた。②「介護講座」は平日開催，「家事講座」は土曜日開催で参加しやすさに違いがあった。③介護に対する意識として，「介護より家事の方が身近に感じる。家事ができてはじめて介護に目が向く，介護の方が難しくハードルが高いのではないか」，「介護は家事より必要に迫られることが少ない」，「家事の方がとっつきやすい」などの意見がインタビューで示された。実際には，周知方法や開催曜日でも参加人数の変化は考えられるが，アンケートやインタビュー結果から総括すると「家事」より「介護」の方が「なじみが薄い」ことが介護講座の参加者が少なかった理由だと分析した。また，アンケート結果の「講座に参加した理由」や「家族への介護経験」を考察すると，「現在介護をしている人」，「今後介護すると想定される人」の参加率が高いことから，「介護は必要に迫られないと介護に興味関心をもったり，介護講座に参加しようと思ったりしない」傾向にあることがわかった。しかし，表３-14「男性介護者の必要性」にある意見のように「講座参加後84歳の母親が転倒，足を骨折し一気に介護が必要になり，非常に困った」，「講座を体験して，『介護は急に来る』『予期せず来て困る』と痛感し，男性も備えておく必要がある」，「参加をしてみて，介護の状況がわかったり，関わり方がわかったり興味関心がわいた」，「このような講座等できっかけを作ることや活動が呼び水になるので重要」。また，「家事の一切を妻に託してきた“企業戦士”が，定年後に家族の介護に直面するケースが多い[2)]」ことからも，「直面して困る」のではなく，事前の備えとしても男性の介護講座は必要度が高いと考える。その他，一般的な介護講座の参加率の低さや，介護職の人材不足などを見ても，介護人気や介護に対する意識が低い現状も考えられる。しかし，厚生労働省調べ「高齢期に生活したい場所」では「自宅」（72.2%）が最も高く，生活の場として住み慣れた自宅を希望する傾向がある[3)]ことや，アンケート結果の「今後このような介護講座は必要か」の問いに「必要である」（100%）という結果からも，男性に対する家事及び介護の知識技術を醸成し，男性の介護参加を啓発・促進していくことは重要である。

３-２　男性の介護講座の内容について

「男の介護講座」に参加した評価は，１回目「要介護高齢者との接し方」は「よかった」（90%），「どちらかといえばよかった」（10%），２回目「移動・移乗の介助と腰痛予防」・３回目「衣服の着脱介助」は「良かった」（100%）であった。その理由については，「実際に福祉用具を見たり，介護を想定した実技・デモンストレーションなど体験を多く取り入れたことや，講師の体験や現場の話を盛り込んだ内容がわかりやすかったこと，気軽に質問しその答えが聞けたから良かった」など意見があがった。そのことから，今困っていることに対して答えが聞けることや実技など見たり体験したりし学べる講座を求めていることがわかった。また，受講者の約半数以上が家族の介護に携わっていたり，介護した経験があったりし，必要に迫られている人も多い。介護で特に困ったことは，「お風呂の介助」という意見が多かった。その他，「親子だと感情的になり喧嘩してしまう」や「意欲のない時の言葉かけ」などコミュニケーションなどの関わり方にも困ったと言う意見があがった。全国国民健康保険診療施設協議会「男性介護者に対する支援のあり方に関する調査研究事業報告書」によると，身体介助分野では「排泄介助」「入浴介助」に対して困難を感じる介護者が多く，家事分野では「炊事」に困難を感じる介護者が多く見られる。困難を感じる背景として，介護者自身の男性性による困難（母親の排泄介助への戸惑い，女性用下着等の購入に関する悩みや戸惑いなど）や要介護者側からの介護に対する抵抗感など介護における性差の影響がうかがわれる[4)]という報告もある。今講座では，「困った時の相談機関等の情報や，介護サービスの利用方法など知らない」という意見も多かったので，男性介護者が困難に感じる内容を理解し，その対策についても伝えていく必要がある。また，厚労省調べでは被虐待高齢者から見た虐待者の続柄は，「息子」が 7,462人（39.9%）で最も多く，次いで「夫」が 4,183 人（22.4%）[5)]と男性介護者の虐待防止も課題である。認知症の介護，介護疲れ，介護知識不足，孤立などが要因となるため，男性の介護講座の内容などにも加え，介護を受ける側，する側双方が安心した暮らしができるための介護講座等推進していかなければならない。

3-3　男性の介護に対する意識について

令和３年度高齢者白書によると，55歳以上の人に介護を頼みたい人について聞いたところ，男性は「配偶者」(56.9%）が高く，女性は「ヘルパーなど介護サービスの人」(39.5%）次いで，「配偶者」(19.3%）となっている[6)]。理由は挙げられていないが，「男性の家事や介護能力が低いイメージ」や，「女性が男性の介護を受ける抵抗感」「性別的役割意識」の影響が考えられる。しかし，高齢化の影響や高齢夫婦世帯の増加からも，在宅での男性介護者は益々増加すると予測できる。

「男女共同参画の視点で男性の介護参加の課題」(表３-15）として,さんかく岡山の職員にとったインタビューでは「男性は，家事や介護は女性の方が得意という先入観があったり，できれば家事や介護は遠慮したいと思ったり，介護は女性に任せておけばよいといった風潮が高齢になればなるほど持っているのではないか」ということであった。しかし続けて，「介護は避けて通れない，心の準備だけでなく，介護講座などで知識等を得るなど備えが必要で男性の意識改革が課題と気付いた」という意見が示された。また,「介護は必要にかられて突然やってくる問題だと思うが，介護は家事ができないとハードルが更にあがると思うので男性も積極的に家事に参加するなどの男女共同参画の推進が重要である」など男性の介護参加という新たな男女共同参画の課題があることをさんかく岡山の職員と再確認出来た。アンケートで,「男性の介護参加はハードルが高いか」という質問には「高い」３名（42.9%),「高いと感じない」４名（57.1%）とほとんど同じ割合であった。家事や介護は男性にとってハードルが高いと決めつけず，生活の一部として学んでいく事が必要である。家事の場合は，妻が高齢となったとか，定年退職を期に手伝おうと徐々に始めることがあるが，介護の場合は，家族の介護など予期せず起きることがほとんどであるため，介護を準備していることが少ないのが現状である。こういった介護に対する意識を改めて，介護は「正しい知識があれば性別関係なくできること」という意見を礎に，性別に関係なく「介護の備え」のための介護講座等取り組む姿勢が今後の社会に必要不可欠である。

お　わ　り　に

本研究は，さんかく岡山の男女共同参画啓発事業のひとつとして行った「男の介護講座」をテーマとした。「男性の介護講座」に着目した理由としては，介護はこれまで女性が担ってきた歴史があるが，超高齢社会・核家族化などの結果,「老老介護」が深刻化し，もはや年齢・男女関係なく訪れる社会問題であることから，男性介護について考えてもらうきっかけ作りとして，さんかく岡山職員と企画した。さらに,参加者を対象としたアンケート及び，インタビュー調査を行い,「男性の介護」に対する意識を分析・考察し，増加する家庭における男性介護者の苦難解消の一助とすることを目的にまとめた。

結果,参加者は,実際に介護に直面し困っている人や,介護に携わった経験があるなど，介護を身近に感じる人が多い，反面，社会一般の男性には認識してもらいにくいこともわかった。中には，受講中「あと一週間で病院から父親が帰ってくるが，活用できる福祉用具，大柄の父親の移乗等介助方法などどうすればよいのかわからず困惑している」という人もおり，実際に介護方法や相談機関などを紹介する場面もあった。このように，介護は身近に感じにくいが，直面すれば生活が一変しとても困難なケースになる事が多いため，特に，家事や介護に疎遠な男性には，介護講座などへの参加を促し,「今後の備え」をしておくことが重要である。また，家事や介護は未だ，女性の役割という意識もみられることから，男女問わず，すべての人が，要介護者になる可能性，介護者になる可能性があることを広く伝え，誰もが輝ける男女共同参画社会に向けた啓発が必要である。今研究では,参加人数が少なかったこともあり，男性の介護に関する意識について充分まとめることはできなかったが，介護講座等の必要性は十分に理解でき,参加者や「さんかく」に携わる職員に実感してもらうきっかけとなった。

「国立情報学研究所CiNii Articles」で「男性介護者」をキーワードに検索すると147件（2022.3.27検索）表示される。内容は多岐にわたるが，在宅で介護する男性の困りごとの把握やその支援，実際の介護状況，男性の介護参加促進などについての研究はまだまだ少ない。そのため，今後も男性の介護参加について研究を進め，誰もが安心して在宅で生活を送ることができるように寄与し

ていきたい。

謝　　辞

本研究をまとめるにあたり，アンケート調査に快くご協力いただいた男の介護講座参加者の皆様，また，機会の提供及び，男性の介護に対する意見や情報を提供してくださったさんかく岡山の職員の皆様に深く感謝申し上げます。

引 用 文 献

１）厚生労働省「令和元年度国民生活基礎調査」
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html（最終閲覧日：2022.3.31）

２）HELPMAN JAPAN「男性介護者の孤立を防ぎ相談し合える場を！介護技術から調理まで学べる『男の介護教室』」https://helpmanjapan.com/article/8039?msclkid=055b3d57ad9511ec9aa7a3d6c2e8d672（最終閲覧日：2022.3.31）

３）厚生労働省「平成28年版厚生労働白書－人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える－」P48

４）「男性介護者に対する支援のあり方に関する調査研究事業報告書」全国国民健康保険診療施設協議会
https://www.kokushinkyo.or.jp/index/principalresearch/tabid/57/Default.aspx?itemid=97&dispmid=1547（最終閲覧日：2022.3.31）

５）厚生労働省「令和２年度高齢者虐待の防止，高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」
https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/000871876.pdf（最終閲覧日：2022.3.31）

６）厚生労働省「令和３年版高齢社会白書」P32
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html
（最終閲覧日：2022.3.31）

参 考 文 献

① 男女共同参画局「コラム男性介護者への支援」
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/column/clm_03.html
（最終閲覧日：2022.3.31）

② 男性介護者と支援者の全国ネットワーク
https://dansei-kaigo.jp/aboutus/?msclkid=055b1ae1ad9511ec951ee8cfb71a4294
（最終閲覧日：2022.3.31）

③ cocomedica magazine「男性介護者に特有の悩みとは？男性介護者の現状」 https://cocomedica.jp/kaigo110/?msclkid=055a7b7fad9511ec9e79670ce9f9d9d2（最終閲覧日：2022.3.31）

④ 斎藤真緒「増える男性介護者の実態と家族介護者への支援の課題（特集 120万人に迫る！ どう支える？ 男性介護者)」コミュニティケア第18巻 第09号 p.49-53（2016）

⑤ 平山亮「介護する男たちをどのようにみるか：「社会的につくられる性別」の意味から考える」認知症ケア事例ジャーナル 14(1)，66-72，(2021)